

『ニュー・シネマ・パラダイス』

1988年/イタリア/ジュゼッペ・トルナトーレ監督作品

くり返し観るたびに、異なる視点

会員 春日井 太郎 (58期)



「ニュー・シネマ・パラダイス
完全オリジナル版」
ブルーレイ発売中
ブルーレイ：3,800円(税抜)
発売元：アスマック・エース
販売元：KADOKAWA
© 1989 CristaldiFilm

心に残る映画。

LIBRAという会員誌の性格上、訴訟が関係する映画がよいとも思えたが、本稿では自分が最もくり返し観た映画『ニュー・シネマ・パラダイス』を紹介したい。

舞台は現代のローマから始まる。主人公は初老にさしかかった中年男、サルヴァドーレ。深夜、自宅に帰ると、故郷の母から電話があり、アルフレードという男性が死んだことを知る。サルヴァドーレは、かつての幼少時代、そして青年時代を思い出す。

第二次世界大戦中、サルヴァドーレはシチリア島の村、ジャンカルド村で母と妹の3人で暮らし、「トト」と呼ばれる少年だった。僻地の村のたった一つの娯楽は、村の中心の広場にある教会が、夜になると様変わりする映画館だけだった。

トトは映画に魅了され、映写技師のアルフレードに何度つまみ出されても毎晩のように映写室に入り込む。その後、ふとした事件をきっかけに2人は「協定」を結び、アルフレードはトトに映写機の操作を教えるようになる。

ある日、映画館が火事になり、フィルムから発火した火を消そうとしたアルフレードは火傷で視力を失ってしまう(当時のフィルムは、燃えやすいナイトレートフィルムと呼ばれるもので、引火性の強い燃焼性だけでなく、自然発火の危険性もあった)。

その後、トトは新しく建て直された映画館「新パラダイス座(Nuovo Cinema Paradiso)」でアルフレードに代わって映写技師となり、子どもながら家計を支えるようになる。

月日が流れ青年となったトトは、自らもムービーカメラを手に映画を撮影するようになる。そして駅で見かけた美少女エレナとの初恋。そして別れ。

アルフレードは、そんなトトに対し、村を出て、二度

と帰ってはいけないと諭し、トトはローマへ旅立つ。

「人生は映画とは違う。人生はもっと厳しいものだ。」
「自分のすることを愛せ。子供の頃、映写室を愛したように。」

というアルフレードの送別の言葉とともに。

30年が過ぎ、サルヴァドーレはアルフレードの葬儀に出席するため、初めて故郷へ帰る。かつて映画が好きという気持ちしか持たなかった青年は、成功した初老の映画監督となっていた。

自分に映画の道を拓いたアルフレードは亡くなり、かつて映写技師を務めた新パラダイス座も既に閉館となり、建物の取り壊しも近い。

そんな中、サルヴァドーレはアルフレードが遺した形見の品を渡される。

はじめてこの映画を観たのは高校を卒業した28年前(!)。その後、上京して和光の裏のシネスイッチ銀座で立ち見で見たり(!)、初めて海外に渡航した際、ロンドンの映画館で観たり。ことあるごとにくり返し観てきた作品になる。

そのたびに、観る視点が異なってきた、かつては青年期の主人公に、そして近頃は初老の主人公の気持ちを強く思う。

また、本作品には89年に公開された国際版と呼ばれる劇場公開版バージョン(124min.)と、ディレクターズカットと呼ばれるバージョン(170min.)が存在する。

映画館の思い出を中心に進む劇場公開版に対して、主人公が成長し、壮年期に達した後の物語が詳細に描かれるディレクターズカットでは物語のニュアンスが全く変わってくることも興味深い。

好きな映画として挙げられることの多い本作であるが、若い会員の方にはご存じではない方も多いかと思ひ、ここに紹介した。